

トリアル・アンド・エラー  
**Trial & Error** No.43



大地の恵み  
(ユニット3)

ソマリア農業プロジェクト

部族間の対立を越えて.....	2
来年度の展望 .....	4
ボランティアは健康管理から .....	8
小さな難民受け入れ国 — スワジランド.....	10
UNHCR 広報誌「REFUGEES」より .....	12
モザンビーク調査報告.....	14
こうしてJVCの運動に参加しよう .....	16

## 部族間の対立を越えて

柴田 久史 (JVC ソマリア)

### ◆プロジェクト開始から1年

JVCがソマリアにおける農業プロジェクトを開始して約1年が過ぎた。1983年7月に開墾を始めたころは荒涼としていたソマリアの大地にも、とうもろこしなどの緑が芽吹き始めている。

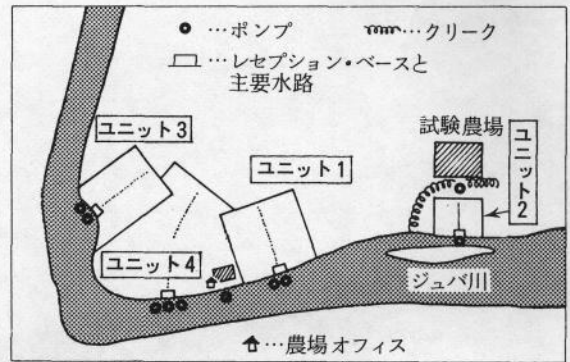
ソマリアのルーク地区で農業プロジェクトを試みたのは、我々JVCが初めてではない。難民キャンプに飢えや病気がまん延していた1981年当時、すでにソマリア政府によって農業プロジェクトが実施されていた。しかし、ポンプも十分な農具もなく、単に難民を訓練するだけのものであった。

その後、食糧・医療援助によって難民が健康を取りもどした1981～82年にかけて、LRCS(赤十字社連盟)、RAU(ソマリア農業省難民農業局)、CEAR(Comité Européen d'Aide aux Réfugiés)、WCI(World Concern International)、ベルギー・メディカルセンターの5チームが、次々とルーク地区での農業プロジェクトを試みた。しかし、いずれもソマリアの厳しい自然(年間の平均気温32～36°C、同降雨量220mm、頻雑な竜巻、塩害)や文化の違い(部族主義、イスラム教)、さらにソマリア政府とのあつれきも重なり、各チームはプロジェクトを途中で放棄した。非常に近視眼的に短期間での有効性を考えるならば、その後、方針を変更したWCI、CEARのCooperative farm(共同農場:農業経験者が地主や有力者に土地・ポンプを提供してもらい、作物を折半する農場)のみに成功の糸口を見出されるだけである。

### ◆混成チーム ユニット1の可能性

JVCは現在、4つの農場でプロジェクトを展開しており、このうち各部族の混成チームのユニット1とかつて農民であった者によるユニット3で農業が行なわれている。つまり、以前、欧米のボランティア団体が、「異なる部族からの混成チームであったがために失敗した型」に相当する農場(ユニット1)と、「WCI、CEAR型」の共同農場(ユニット3)が同時進行していることになる。残りのユニット2と4は現在、整地が行なわれている段階である。

ソマリアにいるエチオピア難民70万人の中には、



かつて農民であった者、遊牧民であった者、半農半牧民であった者が混在している。\*1 もしJVCがWCI、CEARのように短期的成功率の高いCooperative farm(JVCの場合、ユニット3がこれに相当する。)のみ援助したのでは、農業を知っていた者だけが生活の糧を得、他の難民は援助のみを頼った生活を続けなければならない。また仮に農業を知らない者がCooperative farmの成功を見て農業を始めたとしても、部族主義が妨げとなり農業を知っている部族が他の部族に農業を教えることは難しいからである。

以上の理由により、我々は混成チームによるユニット1での作業を開始した。部族間で対立が起こるのではないかという危惧もあったが、それ以上にもしこの混成チームが成功すれば、画期的なことになるという可能性をも秘めていたからである。

### ◆部族を越えて

まず、'84年の4月1日にユニット1(14ha)の農民を選出した。内訳はマガネイキャンプの6つのセクションから2人ずつ計12人とRAUの農場で働いていた12人と旧地主4人の計28人である。JVCは当初、ユニット1について共同作業の大切さを理解してもらうために、収穫の時期まで土地の分配を行なわない方針であった。そして、毎日1家族当たり2名に共同作業への参加を義務づけた。しかし、作業を拒否するものが現われ、一時、土地が荒廃してしまつた。このため、かれらの中に、土地さえ分けてもらえば、自分たちだけで農業ができるという要請が出たため、7月初旬に土地を分配することになった。その後、かれらは、次の3つのタイプに分

\* 1……柴田 久史は、今年6月9日、ユニット3（ソマリ・アボ族）の難民20名を対象に、家族数、家畜数、以前の職業などについて、アンケート調査を行なった。これによると、この難民20名のうち農業経験者は19名にも達し、以前にラクダを持っていた者はわずかに1名、他にヤギを

持っていた者が17名、牛を持っていた者が19名だった。この結果、ソマリアの気候風土を考慮するとラクダなしでの移動は難しいことから、少なくともソマリ・アボ族は、“定着農耕民”であったと考えられる。なお、今回アンケートに答えた難民の平均家族数は5.3人であった。

かれた。①農業の経験がある者で毎日農場へ来てプロットの第3チャンネルを作成し、種植えを0.5haすべて終えすでに発芽を見ている者、②農業をやる気はあるが、灌漑システムを知らないため、水のロスが多く、チャンネルに水を流すたびに壊し、修理している者、③農業を全く知らないため、時々しか農場へ来ない者——である。①の農業経験者は、土地さえ分配されれば、②、③の者と関係なく自分だけで農耕できると考えていたが、共同農場であるために他の者の未熟さ、不熱心さが、しだいにかれらにも影響してきた。一例をあげると、ユニット1の28人の農民のうち、1日に水の供給を受けるのは4人に限られているため、農業をよく知らない者が戸惑っている、7日に1度の水の供給がずれ込むことになる。こうしたことから、自然に利害関係が生じ、以前は反目していた者同志であろうと言葉の通じない（ソマリ・アボ族の言葉は他の者に通じない）者たちでも正しい農業の方法を他の者に教えたり、要求する状況が生まれた。我々JVCもユニット1に全力を注ぎ、ユニット3やユニット1の一部で成功している農地へ、農業を知らない者を見学に来て行った。この結果、かれらも正しい灌漑システムを学び、うまく水をプロットに供給し始めた。また、農業を知っているアボ族の者が自主的に、他の部族の農地へ手伝いに行ったり、ポンプやチャンネルが壊れると共同で修復するようになった。これまで、我々は、彼ら自身で問題を解決しようとするまで、もしくは何らかの要求が出るまでじっと我慢し、彼らの自主的、積極的な態度を待って行動することにしてきた。こうした状況は、我々外国人の管理、指導を離れ、彼らの自発的行動を促すためである。とはいうものの、彼らは将来的にJVCに頼らず、自らこの農場で生計を立てていかねばならない。そのためには今後どのようにして彼ら自身の中に、土地あるいは農業への愛着心を芽ばえさせるかが、今後の課題になってきた。このため我々は、パパイヤ、バナナ、砂糖きびなどの永年作物を試みるつもりである。

（うち7、8割が遊牧民）が今後も遊牧だけを頼りに生活することは難しく、定着農業へ移行することを余儀なくされている。しかし、現在、遊牧を営む者が急激に農業へ転換することは難しい。そこで旧遊牧民である難民からしだいに農業へ従事してゆけば、ソマリアの社会全体が変わってゆく可能性がある。

我々は、もしこのプロジェクトを通して、反目し合っていた者同志、協力する意志のなかった者同志が、共同作業をすることによって、同じ灌漑設備を持ち同じ利害関係を持つ農民として1つになれば、この部族主義の垣根も取り払われるのではないかと考える。他のボラグが失敗したように、違った部族の異った生活様式を持つエチオピア難民を1つに組織することを、我々はあえてユニット1で試みるつもりである。これが成功すればソマリア政府による上からの統制ではなく、彼ら自身によって下から自然に変わってゆく可能性を秘めている。また、JVCの20人～40人規模の農場は、他のボラグの数百人（農民1人当たりの耕地25m<sup>2</sup>）の農場とちがい、ソマリアの部族単位の生活に適していると考えられる。さらに、この日本の農村社会を思わせる小集団の形成は、JVCの力量にかなった規模であり、かつ現地の人々と対話、接触を緊密に行ないながらプロジェクトを進めてゆくというJVCの最も得意とする方法にも適している。

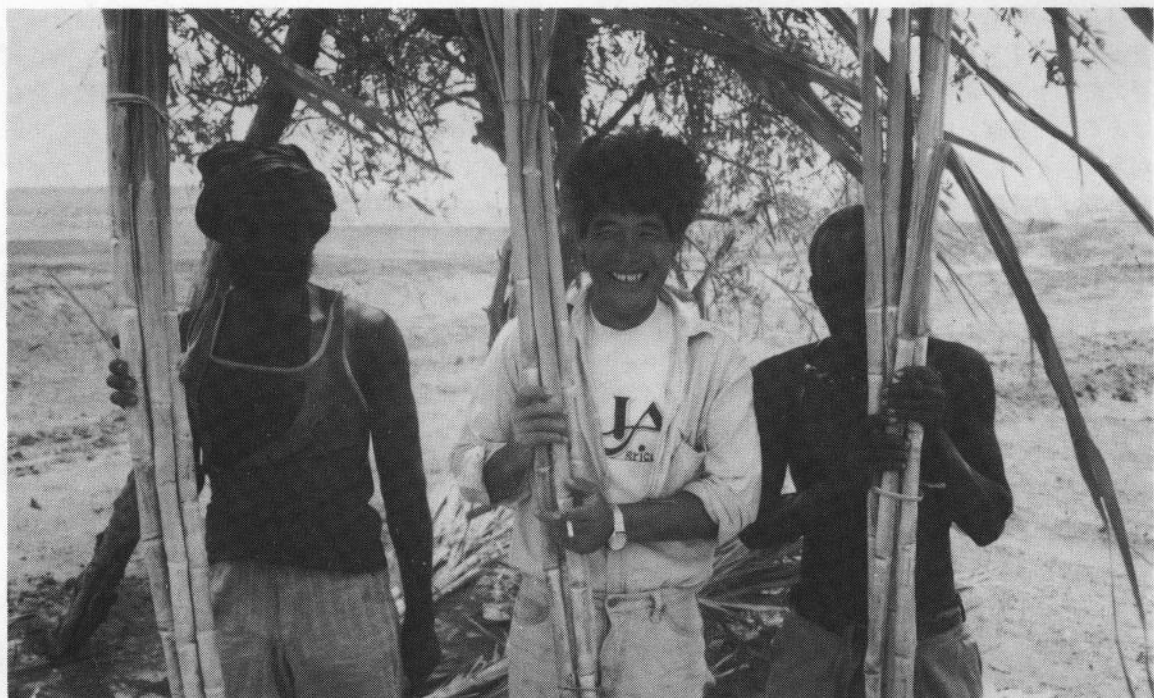
我々が、ソマリアにおいて農業プロジェクトを開始した当初は全く先が見えず、試行錯誤の繰り返りで、非常に否定的な要素も強かった。しかし、今では十分な人材と資金を得、ソマリアの文化、習慣もわかりつつあり、やっとプロジェクトの進んでゆく方向に光が見えてきた。このアフリカへの第一歩とも呼ぶべきJVCのソマリア・プロジェクトは定住も含めて非常に長期的展望の必要なプロジェクトであり、しかもマガネイの難民がイスラム教徒で遊牧民であるという社会背景を考慮すると、少なくとも今後2～3年の同プロジェクトの継続が必要であると考える。

#### ◆今後の展望と課題

FAOの統計にあるように、300万人のソマリア人

## ソマリア農業プロジェクト・来年度の展望

税田 芳三・高橋 一馬・柴田 久史・掛村 均



大きな可能性を秘めるさとうきびを手にして (中央は高橋一馬)

### ◆当初の計画では来年の6月終了

税田：ぼくらのプロジェクトは、'83年の7月から始まり、85年の6月にある程度終了するという計画できています。来年の6月に撤退ということで、今のうちから行動を起こせば、ソマリア政府のRAU（ソマリア農業省難民農業局）に引き継いでもらうことになる。まず、来年の6月以降も続けるかどうか、そして地域定住、農業、水利開発などの専門家で構成される技術団（Technical Unit）も到着し、もうすぐ遠大な構想で始められるであろう定住プログラムとぼくらのプロジェクトを、どう関連づけるかの問題がある。農業は土台になるプロジェクトだから、ニワトリを飼うプロジェクト、魚をとるプロジェクト、クワ作りのプロジェクトなどをすることも、可能なわけ。そういう関係以外に、農民に対して読み書き教室、料理教室、栄養指導なんかも可能性があると思うんですよ。ぼく個人は、こういうふうに発展させたらいいんじゃないかと考えているわけだけど、そうなったら、当然、人手が必要になる……。ボランティアが増えれば、健康管理・福利

厚生の部分の予算組みを増やさないかん、とぼくは考えているんですよ。今、ぼくらの予算ちゅうのは、こういう、書類や寝た場所に砂がかぶるようなところに住むことによって保たれているわけで、(人が増えないにしても、長期戦を構えるなら、改善する必要があるかもしれない)。

### ◆プロジェクトの真髄は来年から始まる

高橋：ぼくたちの農場の最後の部分で、入植する農民を選んで、最初の植え付けが終るのが、'85年の5月か6月になると思うわけ。そうすると、(一応期限の切れるころに)ようやく、JVCの農民の耕作が一齐に始められる態勢になるのね。最初の植え込みというのは、非常に暫定的なものであって、とにかく緑にしようという感じにするわけ。だから、それから、本当に農業技術者が必要となるの。ここには指導者がいないし、このプロジェクトの真髄は、そのころから始まると思うわけ。だから、もし6月で引き上げるっていうことは、非常に中途半端だと思うのね。それが一点。それから、我々の活動が初

期の頃は、いろいろな障害があったりしたけれど、1年たってみて、他の団体があまりにも情けないのか、あるいは我々がちょっといいのか知らんけども、NRC（ソマリア国家難民局）とか、政府関係のレベルでも、ずいぶん評価し始めているなという感触が、個人的にはあるわけ。今の時点では、人手もないし、余裕がないけど、来年の5月か6月になれば、いろんなことができると思うのよ。これが第二点。この二点で、もう少し続けたら、と思う。

#### ◆ぼくらは歴史上初めての「実験」をしている

柴田：ぼくが一番危惧したのは、わしらのいる間は大丈夫だという自信があるんだけど、撤退したあと、ここが砂漠の楼閣になるんじゃないかということ。今までのルーク地区のいろいろなプロジェクトを見ると、ボランティア団体が引き揚げたあと、必ず、元のもくあみになっているということなんですよね。難民がどういうことを考えているのか、とか本当にここに住む気があるのか、などを知らなかった。でも、そういうことを追求していくとNSS（国家秘密警察）にひっかかる（笑）。（柴田は「スパイの容疑」で1日喚問されている。）それで、はっきり分かったのは、ぼくが最初思いこんでいた事が外れてしまったんだけど、彼らは一様に遊牧民ではなかったことなんだよね。農業中心にやっていた人間もいるし、半農半牧もいるし、遊牧だけの人もいる。そういう人たちが雑多に入ってきている。今までは違う場所に部族単位で住んでいて、交流がなかった人たちが、この難民キャンプで初めて一緒に住んでいる。自然環境の厳しさもあるだろうけれど、そういったことへの無理解が彼ら（欧米の団体）の失敗の、大きな原因じゃないのだろうか。今まで、敵対したり、顔も見たことがなかった人たちを、一つの農場の中で、共通の利益に対して共通の行動をとるように組織する、そのことに失敗したからではないか。さらに、援助が非常にたくさん入ったために、彼らは依頼心が強くなっている。民間の救援団体が来れば、「全部くれる」そういった面があるのではないか。そしてそれは、物の乏しい環境であっても、裕福なものが広い親族中に分け与えるという

習慣の中で、生きて来た彼らの根本的な生活態度かもしれない。でも、JVCのユニット1には、28人の難民がいるけれど、3つの部族からきている。その彼らが共同して主用水路を確保するなどの共同作業をするし、全員から10シル（1ソマリア・シリング≒15円）ずつ集めて、見張りをやったりしている。これは彼らの歴史、始まって以来のことだと思う。そうして、一緒に暮らしていれば、仲良くなり、子ども同志が恋愛したり……。それで、わし、非常に期待しているの。

#### ◆彼らは本当に援助を必要としているのか

掛村：俺、最近考えるんですけどね、このプロジェクトの主眼は、農民との対話、難民との対話にあると思うんです。相互理解が重要なんじゃないかって、彼らが相互理解を求めているのかどうかを知ること重要視してきたと思うんです。これからは、我々JVCの良さは保っていかなくゃいかんと思う。

（大規模なプロジェクトは）まさに、援助する側から見た援助なんですね。難民はどっちを求めているかっていうことを常に考えないかん、と思うんです。

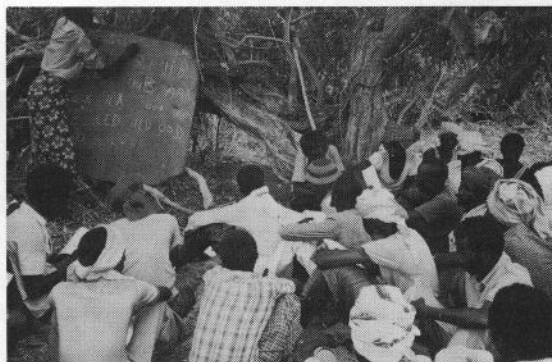
税田：つまり、難民が対話を必要としないんだったら、こっちも必要としない、ということ？

掛村：そうです。援助する側とされる側から見た援助は、全然違うものやと思うんですね。そのこの違い見極めるために、対話が必要だと思うんです。彼らが日本人と相互理解をね、深めたいと思っているのか、そういうのを知らなくゃいけない。この間、佐藤 俊さん（生態人類学者、7月下旬マガネイ難民キャンプの生活の実態を調査）について同行取材したんだけど、その時に一番強く感じたことは、俺はこっち来て何カ月たったけど、まだ何にも知らなかったの。難民の実態ね。いろいろ情報は入ってくるけど、本当の意味で、何故、難民として出てこなくゃならなかったか、という理由がね。これから、農業以外のプロジェクトを進めるときなど、「これができるから」、「UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）にうけがいいから」、そういう視点でやったら、絶対にいかんと思う。それがほんまに難民のために必要かどうかという視点はね、常に持つとかなきゃ

いかんということ。

柴田：それなら同感だな。しかし、掛村が言ったようなことをすると、NSSに訴えられることなの。むしろ、知りたい、対話したいってNSSに言うとか、対話はいらん。個人的な接触はいかん。プロジェクトだけやってればいい。と言われた。でも、対話せんプロジェクトはつぶれていくし……。あえて対話すると、俺ではなくて話した相手に迷惑がかかる。それが困るわけ。徴兵などという手もあるし。

作業の合間の読み方・書き方教室



◆おかみさんを対象に料理教室を開きたい

高橋：男じゃなくて、女の人たちをね、おかみさんを対象にした料理教室とか、新しい野菜の食べ方、そういったものを農業プロジェクトのなかで、展開していきたいと思うね。ここの難民は餓死者というのは聞かんけどもさ、疾病率は高いと思うのね。遊牧民たちは、乳製品とか肉とかを食べる生活してきたのが、難民生活でも農民になっても、肉なんて食べれないんだよね。食生活がガラッと変わって、体内の栄養バランスが崩れ、そこに病原菌がへばりついてさ……。

柴田：俺、見た限りでね、皆、貧血やね。それから皮膚が非常に固いのね。ビタミン不足じゃないかって……。わからんけどもね、医学的なことは。乳製品は、あらゆる栄養素を含んでいるんですよ。今、食ってるのが、メイズ（とうもろこし）、米とかさ、あと油、トマトだよ。何が欠落しているか、分かんと思うんだけどさ。

高橋：それから、縫いもの。ミシンとか、そういうものを何台か置いて、古着や布きれをできれば

日本から送っておいてもらって、練習に作らしてみようとかさ。で、職業訓練をかねることになれば、もっけの幸いであって……。

◆一石で五鳥の効果、サトウキビの栽培

高橋：で、もう一つ。柴田君とこないだラム酒を飲んだ時にね、ラム酒はなんでできるかってことから始まってさ、サトウキビだろう……。で、今、用水路の風蝕の防止に、用水路沿いにルシナという木を植えているけど、木の成長には時間がかかるから、サツマイモとサトウキビを植えることを考えたわけ。今、この社会では、砂糖に、他の全部の食費と同じくらい大金を使っていると思うんだ（彼らは、紅茶に大量の砂糖を入れる。）。で、サトウキビをしぼって、黒砂糖にして出せたら、有力な収入源になると思う。サトウキビは多年生の作物だから、たえず緑があって、株がしっかりとくいこんでいるから、風蝕の防止にもなる。また、たえず作物があることで、（遊牧民で農耕の意識を持っていない）難民が、土地に執着するんじゃないか、ということも考えられる。外からの（家畜の）侵入は彼ら自身が防ぐし、我々が懸念してる、土地を譲渡するってことも、ある程度防げるんじゃないか……。それから、幹はしぼっても、サトウキビの葉は家畜のエサになるし……。塩分の多い土壌でも育つ……。だいふく前ミソだけど、一石四鳥、五鳥、いい点ばかりになるんだな。何より、横着できる。1回植えれば、2週間に1回くらい水をいれれば、2、3年もつんね。

柴田：そうなんだよね。メイズが（収穫が終わって）枯れると、また砂漠になるんだよね。メイズは手のかかる植物だから、最初から1人で5ha(5,000m<sup>2</sup>)もできないかもしれない。半分、サトウキビにして、半分、メイズにしたら、なんとか、彼らの力で、できるんじゃないかな。

◆砂漠化に対する危機感が薄い

税田：仮にサトウキビを精製するとして、何が必要になってくるの？

高橋：まず、くだいて汁を出す機械、しぼった汁を砂糖の結晶にするための煮つめる大きな鍋。だけど、

農場の中央を流れる水路と実をつけた  
とうもろこし(ユニット1)



ここでは煮る時のたき木がね、限界があるわけ。その工程をどうしようかと……。

柴田：そうなんだよな。木がないわけ。また、木を切って砂漠を作ることになったら、困るわけ。本当に困ったのは、JVCが燃料の問題をうまくやったとして、もうかるって分かったら、皆、サトウキビをやるでしょう。そのとき、一番安易な方法をとると思うわけ。どんどん切っていくんだよね。ものすごい量がいるから……。

税田：本当、あの木の燃焼効率を考えると、ものすごいロスがあるね、ここの人の調理の仕方。砂漠化が進んでいるからって、危機感を持っているのは、北側諸国だけなんで、実際、ここに住んでいる人は、何とも思っていないね。少しでも思っていたら、あんな薪の使い方やくべ方をせんよ。VITA (Volunteers in Technical Assistance, アメリカの民間団体) がやってる、土を固めてカマドを作って燃やすやり方なら、5倍の燃焼効率が上がるのに、あまり普及してないやんか。そうそう、ソマリアに有名なジュバ川サトウキビ・プロジェクトというのがあったのね、かって。で、その時膨大な人間がそこで働いていて、今は首を切られて無職になっている……。ぼくは、どこでやってたか、まだ続いているか、ちゅうこと、あんまり知らないけど、どういうふうなやり方をしとるか、調べるのも手やね。

柴田：知りたいね。失敗したか、どうかも。



あいかわらず薪の使用量は多い

◆JVCのボランティアは耐乏生活が必要なのか

税田：1万2千ドルくらいするんだけど、いいプレハブ住宅があるんだ。UNHCRなんかも、ぼんぼん

建ててるわけ。便所も水洗になっててさ、その便所を洗うタワシまでついているの。もう当然、ベッドからさ、フォークから鍋からさ、そして大きな貯水タンクも……。それもモーターで水を上げて。もう、とにかく都会的な生活が、その場でできるような。入って右側にでっかいオフィスが1つと、入ったところにトイレと倉庫があって、ちょっと広い応接に使えて、左側に2つ部屋があるの。

高橋：それはそんなに高くないけれど、やはり、JVCには3畳ひと間でもって頑張るみたいな……。

税田：いつまでも、タイでの感覚に固執されたら、困るつう気がしてんの。それは、これからJVCがいろんなどころに行くのであれば、先例にもなるし。一番最初にプレハブを持ってきて、車を注文して部品も同時にする…(そのほうが効率的である)。ここアフリカでは、足(輸送手段)がないとねえ。それから食料ね。この食住を確保しなかったら、アフリカでのプロジェクト、できんですよ、きっと。

高橋：衣類もいります。パンツありませんし。

税田：綿のパンツがないっていうの、やっぱり苦しいよな。ただ、プレハブのことだけど、ソマリア人がどう受け止めるかな、という問題もあるんだ。差がでてくると思うから。

高橋：ぼくらが順調に行っている原因に、日本人は、強圧的というのではなくて、少なくとも対話しようという姿勢が見えるっていうことが、分かっていると思うんだな。それはなぜか。こんな粗末なとこに住んで、夜、夜中でも対話して、ミーティングしてさ、彼らと同じような生活をしている……。

柴田：たしかに、日本人の姿勢は、ぼく、正しいと思うわけ、なるべく現地に合わせようとして。でも、厳しいよ、ここ。実際問題として、日本に帰る奴、皆、病院送りだし……。(終)

## 「ボランティアは健康管理から」

ソマリア・1984年7月

JVCは、今夏2人の学生夫婦をボランティアとして受け入れた。ジュニー（妻、アメリカ人）は「開発」を、アンドレアス（夫、オーストリア人）は「アフリカ問題」を勉強中。2人の手厳しい批判を紹介します。

### ◆アンドレアスの感想

ルーク地方は、特に開発事業の難しい場所柄で、理由は多々有りますが、主なものを2点あげてみると、その過酷な気候と対処する相手が難民だと言う辺りに原因がありそうです。

JVCの人々は、この非常な悪条件の下で働くわけですが、それでも彼らの中に何かをするのに十分な気力があるのには驚きます。とはいうものの、潜在的エネルギーのレベルは既に落ちてきているし、そのうちもっと低下するはずです。

私が心から信ずるのは、プロジェクトとそれに関わる人達のための、生活環境向上の必要性です。特にビタミン類が欠乏しやすいので、食生活の改善と風や砂から身を守るための住居を考え直すべきだと思います。十分な栄養と休息が、尚一層活力を高めるはずです。

私の見るところ、群を抜いて大変な問題は難民と直接対処している事実にあると思います。東南アジアの難民援助でかなりの経験を積んでいるJVCが、なぜ、特にこの地域で農業開発プロジェクトを開始したのでしょうか？

ソマリアと比較すると、アジア地域の方がずっと農業を行なうのに適した条件がそろっているに違いありません。

それからもう1点、この地で農業プロジェクトを推進する上で問題だと思うのは、遊牧民の血を引く人々とある部分で対処して行かなければならない事実です。（これは、ユニット3の農民には、当てはまらないように思います。）

また、私は、次の2つの大きな疑問を抱いています。それは、JVCが一たんソマリアを去ってしまったら、その後政治的に何が起るのかという点と、難

民が祖国へ帰れるようになった場合、彼ら全員が農場を見捨てるのかという点です。前者の場合、農民が自分達でポンプ用ディーゼルや予備の部品を入手出来るのか、政府が否定的意味で介入して来るのか、後々誰が資金面で、プロジェクト・マネージャーのような人達を支えるのか等々の疑問が生じてきます。

私は、JVCがこの事業全体の開始以前に、いったいどの程度、将来への長期的展望を持っていたか、またどのくらい先を見て計画しているのか、そこに非常に関心があります。

私の考えでは、祖国へ帰った時に活用しやすいという点で、東南アジアで行なっている自動車整備や、他の工芸的技術を実習する方が良かったのではと思います。その意味において、読み書き教室は有意義であり、教える技術にもっと力を入れるべきだと思います。非常に基礎的な経済や、簡単な車の修理作業を教えるコースなどは、大いに実践的価値があると思いますし、これから先、政治的困難に直面するであろう難民の人々の事を思えば、法的手続きを処理するための入門コースなども悪くないでしょう。

農業部分について言えば、JVCの人々は、この分野でもっと彼ら自身に学ばせる努力が必要です。自己訓練の勉強法は決して止めてはならないし、また、教えることと学ぶことにもっと力を入れれば、事業全体の将来も実り多いものとなりましょう。

最後に、開発に関する一般的コメントですが、試行錯誤は確かに発展して行く上で、必ず通らねばならぬ道かも知れません。しかしながら、自然に調和がとれ、意義があり、しかも成功する確率のある目標を達成するためには、長期的かつ包括的なプロジェクトを組むことが大切なのです。

JVCで一番好きなのは、その模範的な相互作用と、JVCスタッフとソマリア人間の触れ合いです。この点で、JVCは他の組織の立派な模範となりました。

私の印象は完全とはほど遠く、ここで提示した疑問や要請は非常に理想主義的で、現実に即さないことは承知です。

しかし、それでもこの内のいくつかは達成できるし、適切な発展とお互いに教え合うという姿勢は、必ずしも全くユートピア的発想ではないと思います。

左から アンドレアス、ジェニー、  
掛村 (JVC)、シアド (ソマリア人スタッフ)



#### ◆ジェニーの怒り

カウンターパート (現地協力者)・システムの是非を論ずる文献を読んだり学んだりした後、ルークで生活しましたが、外面的にはかなり否定的になってしまいました。理論の美しいこと、真に能力を有し、配慮の行き届いたカウンターパートを見つけることは偶然の成せる業で、あなた方に勝算はありません。私が思うのに、彼らは全員ルークを離れるのが待ち遠しそうだし、つまりJVCは、現在彼らにただある種の社会的便宜を与えているに過ぎません。JVCは、西洋の聖職政治的かつ権威主義的構造を移植するより大きな枠組の中で働いており、そのシステムは、根本的に部族の姻戚関係と、多額のお金に重きを置くことなのです。

難民援助も必要な事ですが、今は開発を手掛けているのです。部族問題の解決には何世代もかかりますから、あなた方の努力は人間として最もふさわしくない事として結局は隠されてしまうでしょう。

農民に残してやれる技術的援助などの他に、その土地を当然の権利として要求する他の人々に対して直答を避け、時間をかせげるような合法的な組織を設立できるのですか？

あなた方のしている事で、一番素晴らしいのが読み書き教室でしょう。これが、私達が伝えられる最も持続的効果のある道具なのです。教育プログラムに力を入れなさい。そして、この遊んでいるチビっ子達をそこに入れなさい。また、彼らの姉妹や、ユニット3の妻や娘達を励まして、お互いに読み書きが出来るように、皆一緒に学ばせましょう。そして、女性を巻き込むよう本当に努力して下さい。これ以上、彼女達が人間として、教育を受ける基本的権利を奪われることのないようにしましょう。

料理教室では、野菜をゆでるより蒸すようにも教えたらどうでしょう。ビタミンやミネラルの損失も、使う薪の量も少なくて済みます。

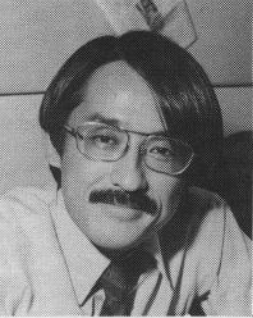
多毛作の利点に関する本も随分読みましたが、同区画内で、例えば、トマトの間に豆を植えたり、日陰を好む物を果物の木の下に植えたりすると、土地にも滋養になるしどうでしょう？

さて、コンパウンド (円形に並んだスタッフの宿

舎) について言わせてもらおうと、ここの男性諸氏は気遣いだと思います。気の違った人だけが、あんな食物を平気で口に放り込めるのです。もう少し自身自身の健康に気を配ったらいかがでしょう。お金をもう少しそっちの方に投資するか、それともJVCの財源から基本的栄養を確保する分の寄付してもらうかのどちらかですね。あなた方こそ、魚を川からとって食べるべきです。もっと玉子や緑の野菜を食べて下さい。緑の野菜が食卓にのったのを、一度たりとも見たことがありません。食べる野菜と言えば農場でバーベキューされたトウモロコシと、トマトソースになったトマトのみです。果物もちゃんと食べなさい。こんな粗末な食生活で、精神力が低下したり健康が遠のいたら、どうやって毎日を意欲的に過ごすのですか。

住環境もしかりです。他のコンパウンドはもっとリラックス出来るように作られています。心がすぐ安まります。あなた方は未開の地から来た訳ではないのですから、この住環境に居てそれが何の影響も及ぼさないで済むとは思っていないでしょうね。もっと疲れがいやせるように改善されれば、エネルギーの消費も少なくて済みます。

最後に怒りの言葉を……。あなた方は、開発従事者としては、高められ啓蒙された自意識に動かされて行動を起した先進世界のほんのわずかな人々を代表しています。そして、あなた方は献身的であり、模範的役割も果しているのです。この前置きと共に、あなた方を1人づつ、この手でコンパウンドの風の吹きだまりへ運んで行けたらと思います。本当に、むかつくような光景です。包装紙に煙草の空箱、即席ラーメンの空袋に数え切れない程のプラスチックの発泡スチロール。先進国の一番見苦しい習慣のひとつです。ゴミの投げ捨てが、先進国でどんなに高くつくことか？ 本当の意味で模範たれと思いますが、まさか自分の国でもやっているのでは？ どうか、我我は全員地球号の仲間だと言う事を忘れないで、正しい行ないを残しましょう!!



インタビュー・1984年6月

## 小さな難民受け入れ国——スワジランド

小田島 利郎氏 (国連難民高等弁務官事務所 プログラム・オフィサー)

アフリカの地図を広げてみると、南アフリカ共和国 (以下南ア) の東の端にスワジランドという小さな王国を見つけることができる。面積は1万7,363 km<sup>2</sup>、人口は57万人ぐらいだが、南・北・西を南アに、東側をモザンビークに接しているため、地政的にはかなり重要な位置を占めている。

スワジランドはその輸入の90%を南アに依存するなど南アとの関係が深い。モザンビーク独立をきっかけに外交路線を微妙に修正し、南アからの政治難民を受け入れるようになった。

今年の2月から、スワジランドの UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) にプログラム・オフィサーとして赴任された小田島 利郎さんが一時帰国されたので、いろいろお話をうかがった。

— スワジランドという国は余りなじみがないのですがどんな現状の国なのですか？

小田島：1968年イギリスの保護領から独立しました。90%がスワジ族ですので、部族対立もなく、81年の国民ひとりあたりの所得は760ドルと、アフリカでは比較的恵まれています。

— 南ア、モザンビークとの関係はどうですか？

小田島：経済的には南アとの関係が強く、依存といった方が適当でしょう。南ア、モザンビークと政治大国にはさまれているため、現実路線をとらねばならず、両国との関係はうまくいっていますね。

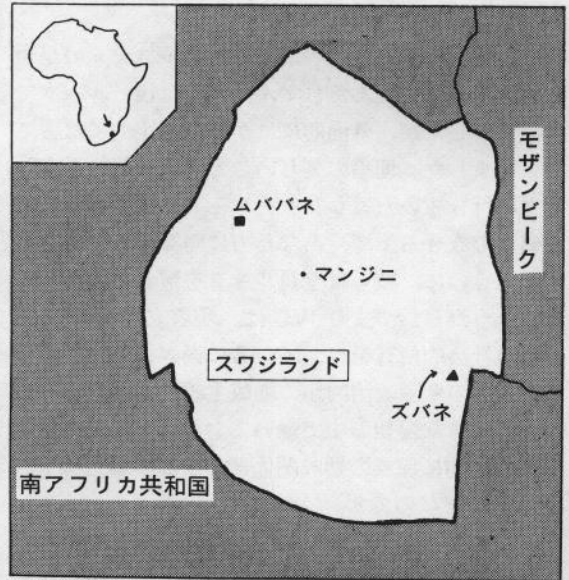
— スワジランドに流れこんでくる難民とは南アからの難民ですか？

小田島：現在、スワジランドにいる難民約7,000人のうち95%ぐらいは南アからです。あとはモザンビーク、マラウイ、アンゴラ、ナミビアなどです。

— 政治難民が多いのですか？

小田島：スワジランドでは他国のケースと違い、経済難民は受け入れないという姿勢をとっています。確かにモザンビークなどから職を求めてやってくることはありますが、難民として援助することはありません。

— 人種差別政策に反対する難民を受け入れるということはスワジランドの南アに対する政治的立場を危くしませんか？



小田島：力関係は圧倒的に南アの方が上ですから、スワジランドに入ってきた難民を連行するなどということもあり、スワジランドが国際機関に主権を主張したこともありましたが。しかしスワジランドでは白人を特に排除するというのではなく、人種的緊張感はありません。

— 先程、経済難民は受け入れないとおっしゃいましたが、どうやって政治難民と分けるのでしょうか？

小田島：まず多くの場合、彼らは直接 UNHCR の事務所にやってきます。簡単な面接をし、政治難民だとある程度わかれば警察の本部に送り、政府に届出をします。そして再び我々のところに戻され、正式なインタビューをし、政府の法的判断が下されるまで、適切と思われる者には1カ月50ドルぐらいの経済援助をします。

— 政治難民として受け入れられないとすると、あとは強制送還ですか？

小田島：そういうことはありません。教育や経済的援助を受けられないということはありません。

— 難民の解決策として本国に帰るのは難しいと思いませんか？

小田島：7,000人の難民のうち6,600人が農村定住者で、政府から土地を与えられています。残りの300~400人の都市難民に対しては、政府は定住を

\* 1 ……アフリカ人民族評議会

\* 2 ……ルーテル派世界連盟

望んでいませんので、第三国定住が考えられています。政府としては、人道的立場から難民を受け入れはしますが、ゲリラの基地を作るようなことは禁止しています。

— 農村にいる難民と都市難民とは、どのように違いますか？

小田島：農村にいる難民はもともと農村にいた人たちです。南ア政府が他の部族と同じホームランドに入るように強制してきたので、それを拒否し、自分たちと同じスワジ族のいるスワジランドに逃げてきたのです。ですから部族が分断されたという意識は強いですが、アパルトヘイトには特に言及していませんね。心情的には反対していますが。それに比べて都市難民は政治意識も高く、個人的に逃げてきた人が多いです。

— 南アフリカから流れてくる難民には、解放勢力というか、ANC\*1 に関係のある難民も入ってくるのですか？

小田島：一応なんらかの形で南アからの政治難民というのは現在のアパルトヘイト問題に反対するわけですから、直接 ANC のメンバーでなくても心情的には彼らと同じものがあるわけです。もちろん ANC のメンバーもいます。

— UNHCR はそうした人達にも難民として保護しているのですか？

小田島：一応インタビューして保護を与えます。ただ多くの場合、ANC の組織があるし、財源もあるので登録しない難民もいます。我々としては、武器を持っていたり、軍事訓練等を難民がしたら彼らを擁護することは難しいです。

— 6,600 人の農村に定住している難民というのはある決った土地を耕しているのか、それともスワジランドの住民に混じって暮らしているのでしょうか？

小田島：政府が 7,000 ha の土地を買い上げ、一家族に 3 ha 与えています。これは住居と菜園用ですので、他に各戸最高 400 ha の綿花用の土地が与えられます。もちろん広すぎるというのならそんなに作らなくてもいいのですが。今のところ開墾した農地は 2,000 ha になります。'82 年、'83 年はひどい干ばつでしたので去年は 1,000 ha にしか綿を植えなかったのです

が、今年は雨がよく降りまして作柄はいいようです。

— 綿は輸出用ですか？

小田島：はい、南アに輸出しています。

— その農業ですが、水はどうしているのでしょうか？

小田島：川の水を利用しています。灌漑設備は一般農家のさとうきび畑にはありますが、まだ難民のところまで来ていません。ですから今回の ICARA II (第 2 回アフリカ難民援助国際会議) のプロジェクトに、50 ha ぐらいの土地に灌漑設備を整え、野菜の生産をしようというのがあります。

— LWF\*2 が開墾地に 2 名の技術者を送っているそうですが、他の NGO の活動、特に UNHCR というしよにやっているのはどのくらいあって、どんなことをしているのでしょうか？

小田島：現在スワジランドには LWF を含め、10 ぐらいあります。ただ、中には規模が小さく、2 人のところもあります。彼らは私たちが規則で援助できない部分、たとえば、鍋ひとつ購入するとか、机やベッドを提供するというような活動をしています。ほとんど地元の団体ですが、家族問題を扱っているところとか、奨学金を援助するところとかあります。

— 欧米の NGO は LWF の他にありますか？

小田島：カナダ政府からの奨学金を扱っているところもあります。カナダへの再定住を許可された難民が対照のようです。

— 先程農村定住の難民についてお聞きしたのですが、都市ではどんな生活をしていますか？

小田島：外部から難民を守るということで、スワジランドの中央部にある第 2 の都市、マンジニに我々の資金で 112 人まで収容できる施設を作りました。

— スワジランドの政府と UNHCR の NGO の受け入れに対する、大まかな方針をお聞きしたいのですが？

小田島：政府が盛んにいっているのは、ローカライゼーション (現地化) というか、確かに外国人が必要な分野はたくさんあるのですが、多少無理をしてもスワジ人を職場につけていた方が将来のためになるのではないだろうかという方針をとっています。確かに一時的には効率は悪いでしょうが、将来的にはその方がいいと思います。

— どうもありがとうございました。

## スワジランド定住の難民たち

南アフリカ共和国（以下南ア）とモザンビークの間で不可侵条約が締結されたことを知らせる発表について、スワジランドと南アの両政府が、両国の間でもう既に安全保障協定を結んでいることを合同発表した。スワジランド政府は、次の点に関して再確認を行なった。つまり、南アから流出して来た純粹の意味での難民に対し、今後も引き続き保護を与えること、しかしながら、アフリカ人民族評議会（ANC）運動のメンバーで南アの安全に脅威を与えると考えられる者については追放を決定したこと、の2点である。154名という数字も明らかにされた。UNHCRでは綿密なる状況調査を行なっている。とは言え、南アから逃れて来たスワジ族出身の難民約7,000人はスワジランド国内の定住地に定着し、引き続き援助を求めている。以下の記事は、同定住地での難民の生活状態に関するものである。

見事に花をつけた綿の木の広大な畑は、ズバネ定住地の難民が今年には幸運に恵まれていることの証（あかし）である。— 昨年、綿花は不作であったが、今年は、南部アフリカを襲った長期の干ばつにも、1月のサイクロンの脅威にも耐え抜いた。サイクロンはスワジランドに36時間で50cmの降雨量をもたらし、大洪水を引き起こして死者とガレキの山を後に残したのであった。道路、橋りょう、鉄道架線も被害を受け、農村地域の中には他所との連絡も遮断されてしまったところがいくつもあった。ズバネは奇跡的に被害をまぬがれた。

スワジランドの首都ムバネの南東150kmのところ、ここにズバネがある。ここには6,000haの農業定住地があり、その周辺には7,000人近い難民が住んでいる。UNHCRの援助計画実施機関であるルーテル派世界連盟（LWF）の援助により綿花の栽培のために1,000haの土地が用意されている。

難民に現金収入をもたらす主要な作物は綿花であるが、とうもろこしや豆類のような耐乾性の作物も栽培されている。蛋白質に欠ける日常の食事を補うためには必要この上もない新鮮な野菜を作ることも、水不足のためにままならない状態である。こういった事情や昨年度の綿花の不作の結果として、ズバネ定住の難民達は今もって自給自足するには至らず、



南アからの難民（ズバネ農業定住地）

その食物の需要のほとんどを世界食糧計画(WFP)に依存している。

マツェンジュワ族出身のサラの身の上話はおそらく、ズバネ定住の多くの難民の典型であろう。スワジ族であるサラとその家族は、南ア政府から住むことを強制されていたズルーの「ホームランド」を1979年に後にし、スワジランドへやって来た。32歳のサラの説明では、スワジランドでのサラの生活はめざましく好転しているという。例えば、サラの5人の子供達は、祖国で使用を義務づけられていたアフリカンス語とズルー語に代って、今では彼らの母国語であるシスワツィ語で学ぶことができる。

スワジランド政府は難民の定住団にズバネに土地を買い入れ、各々の家族に5haずつ分配している。スワジランド政府側のこのような寛大な措置にもかかわらず、サラの話では、難民達の生活における問題は山積しているという。

サラの家族が主食としているのは、とうもろこしのおかゆに豆類である。食べるためにせよ、売るためにせよ、野菜を作る水は不足している。ズバネ定住地の難民の子供達の中には、実際、低蛋白栄養失調症から髪が赤味がかかるなど、長期にわたる粗食とビタミン不足を如実に示している者もいる。

灌漑の必要性は極めて大きい。スワジランド政府は、78万ドルの予算で灌漑計画を準備しており、これは1984年7月9日から11日にかけてジュネーブで開催の第2回アフリカ難民援助国際会議(ICARA II)において討議される予定である\*1。この計画は、ズバネ地域に食糧用及び売り物として年間1,000トンの野菜生産高が得られるよう立案されたものである。



サラの夫は熟練した機械工だが、スワジランドではその技術を生かす仕事につけずにいる。そのため、サラの家族は、綿花の収穫から得る収入に大きく頼っている。LWFの難民定住担当官であるレオ・ノーホルトは、今年の綿花はできが良く、良い値で売れると見込んでいる。綿花が売れば、サラが真先にすることは、子供達の学費を払うことである。スワジランドでは、難民もこの国の国民も等しく教育を受けることができ、難民が特別な費用を課せられることもない。しかし、教育設備は十分とはいえない。ズバネ地域の小学生の約65%は難民の子供達であるが、教室も教師も不足しているため多くの子供達が入学できずにいる。小学校の義務教育制はまだ先のことである。ズバネのような人里離れた地域では学校に教師を呼ぼうにもむずかしく、特に、教師達のための住宅施設が全くない現状においては困難である。事実、今年の始めに我々が定住地を訪れた際にも、教師達が教室を自分達の住居用に占有することを余儀なくされ、それも時には一つの教室に2~3人で住むという状況で、授業は外の木陰で行なっている学校もいくつかあった。

子供を持つ難民達の多くが、すぐ近くに中学校・高等学校が一つもないことに対して大きな不安を抱いている。このような状況に対処をするべく、スワジランド政府はICARA IIに一つの計画案を提出した。この案が受け入れられたなら、ズバネ定住地には小学校の教師用の住居が建てられ、更には、難民及びスワジランド国民の子供達計240人を収容する、2棟続きの中学校も建設されることになる。

ズバネ及びその周辺には人口に見合うだけの十分な医療施設もなく、その結果、住民の保健衛生基準は好ましくもなっていない。例えば、ルビニ診療所などは、建物も古い上に設備も乏しく、狭苦しいワン・ルーム式のところで医療スタッフが1日に30~40人の患者を治療している。我々がこの診療所を訪れた時には、診療所のスタッフは、外来患者の中でもコレラの疑いのある患者の診察と、結核患者の治療にあたった。病院は、最も近いところでも80kmは離れている。スワジランド政府の希望がICARA IIで認められたなら、政府は要請額

20万ドルを受け取り、この診療所の設備を向上させ、産科設備を備えることも可能となる。

サラの毎日は、定住地の日々の動きの中で難民達が果している活発な役割を反映している。早朝、サラは綿花をつみ取り、成育途上の若木を守るために畑の除草をする。我々が訪れた午後には、サラはズバネ定住地共同体の種々の委員会の合同集会に出席していた。これらの委員会は難民の定住スタッフとにより組織・管理されており、農業、家畜、健康、共同体の発展、教育等の重大な定住活動の数々を調整するために作られている。これらの委員会への女性の参加も日増しにふえている。また、この頃では、家計や家事の技術を論じ合う委員会が、裁縫や仕立て、手工芸を学ぶことのできる場所として、女性のグループによって広がりを見せている。一週間に数時間、サラは、成人向けの読み書きのクラスで自分の母国語シスワツィ語を教えている。こういった学習課程の数々は政府の援助を受けて難民が作っているものであるが、定住地の高齢者や大人にとって役立つものとなっている。

今年、ズバネは自然との闘いに勝利を収めたようであるが、難民達が自立するための援助を与える国際社会の助力なしには、来年もこの闘いに勝つ見込みは極めて薄い。

スワジランド政府の難民対策局の社会事業担当官であるジョン・マンブ氏は、同国政府がICARA IIに提出した申請に対して国際社会は好意的な反応を示すであろうと期待している。この期待が実現したなら、スワジランドの経済が難民の存在によって受けている負担を軽減することになると思われる。「この計画案は非常に規模の大きなものではあるが、難民を定住させ、援護しようとするスワジランドの継続的な努力の中で、決定的に重要な計画である。」と同氏は述べている。 (翻訳 平井道子)

\* 1……国連事務総長が難民問題をかかえるアフリカの22カ国に、自国の開発を含めた難民援助プロジェクトの申請を呼びかけ、14カ国がこれに応じ草案を提出した。その結果、128のインフラストラクチャー開発プロジェクトがまとめられた。

## モザンビーク調査報告

金田 衛 (武蔵野赤十字, 外科医)

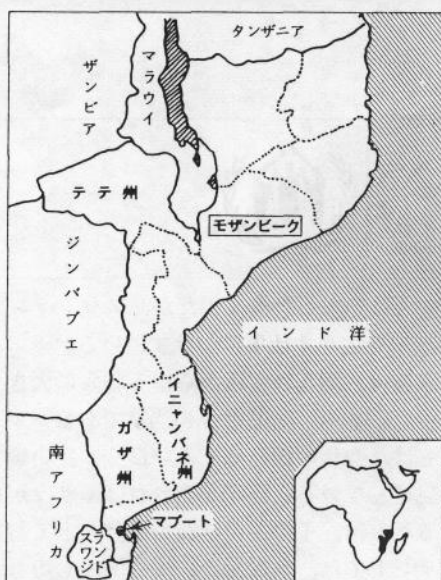
1982年から、干ばつが南部アフリカ地域を襲った。モザンビークでは、総人口の43%に当たる470万もの人が飢餓にあえぐという最悪の事態に陥ったといわれる。隣接諸国も同様の干ばつに見舞われたにもかかわらず、モザンビークだけがこうした事態になった理由には、人災の側面が少なからず影をおとしている。また、飢餓を原因として医療・保健の面でも深刻な事態が続いている。

### ◆飢餓発生背景

アフリカ大陸南東部に位置し、インド洋岸に面したモザンビークは1975年、500年以上に及ぶポルトガルの支配から脱して独立した若い国である。その独立の時点で政府によって推し進められた社会主義体制を支柱とする農業政策、及び反政府ゲリラ(MNR)\*1の活動激化が今回の飢餓を最悪にしている原因である。農業政策において政府は社会主義化を急ぐあまり、国有及び集団農場への優先的投資に重点を置いた。しかし、これは従来、大半の耕地を占める小農による伝統的な原始的農法・焼畑農法を無視したものであった。その結果、以前の商品流通機構は破綻する形となり、小農は生産意欲を喪失し農業生産力は激減するに至った。これに追い討ちをかけたのが干ばつである。3年間の降雨量は計測できない程少なかったという。これにより国民の80%以上が栄養失調という悲惨な状況に陥った。また、南アが支援している反政府ゲリラMNRの活動が79年以降激化したため、主要交通路・情報網が寸断され、麻痺した状態となった。飢餓緊急時にWFP世界食糧計画など国際機関及び民間団体の食糧援助があったにもかかわらず、輸送路の寸断により援助は遅々として進まなかったといわれる。特に、首都マプトから1,700kmも離れたテテ州はこれにより陸の孤島と化している状態にある。

### ◆保健・医療面

奥地に行けば行く程、飢餓が深刻化していくという不等式は、また保健・医療面でも顕著に現われる。今回の干ばつでテテ州93万人中50~60万人が疾患したといわれるが、特に小児は栄養不足、下痢、肺炎、マラリヤなどで、また大人は結核、肝不全、マラリヤなどで死亡する例が多い。食料不足が深刻化



する雨期には更に病気が激増するであろう。テテ州には280床を備える病院があるものの燃料不足のためその機能は麻痺するに至っている。更にテテ州の奥では、医療に必要なもの全てがない状態である。ここも雨期には最悪になるであろう。また、ジンバブエ側国境沿いのプランテーションにいる難民は、保健指導員の目が届かず劣悪な衛生状態で苦しんでいるとも伝えられている。

総じて、モザンビークでは、保健衛生指導員を含む医療スタッフ、医薬品、水などが全く不足している。しかも移動の際の足となる車、ガソリン、輸送路が不十分であることは致命的である。

なお、昨年、ジョージ・ラザフォード博士がガザ・イニヤンバネ地区でおこなった症例抽出調査では、小児で、栄養不足19%、クワルシコア(強度の栄養失調)2%、下痢、栄養失調などを原因とする死亡率が9%(10人に1人)、り患率が27%(4人に1人)という報告がなされている。

### ◆モザンビークの課題と今後

モザンビーク政府は、昨年からの政治路線を修正し始め、対外的にはソ連一辺倒から西側諸国への門戸を開放するという旨を発表した。これまでの急激な社会主義政策による農業不振、ゲリラ活動による間接的な経済的圧迫をどう打開してゆくのが、今後の大きな課題である。医師としての見解を述べさせてもらうならば、WFP、UNICEF 国連児童基金、UNHCR 国連難民高等弁務官事務所、西欧の民間救援団体の援助により緊急事態は回避できそうなものの、慢性的な問題すなわち、“感染症と栄養不良は手をとりあって不幸な人の家の扉をたたく”という状況は永続化し、何の策も講じなければ、おそらくそのまま悪化する一方であるということである。

\* 1…… Mozambique National Resistance

# 「JVC全体」を支えて下さい

佐々木 志保 (JVC東京事務所, 財務担当)

本誌第40号に「財政緊急アピール」として、自己資金が大変に不足していることを呼びかけたところ、多くの皆様からご理解とご支援をいただきました。8月・9月の合計は、運営経費募金だけで75件、約763,000円でした。また、募金というお金の形でなくても、「財政がそんな状態とは知らなかった。」という驚きや激励のハガキなどもありました。形は様々ですが、多くの皆様にJVCの財政について関心を持っていただけたことを心強く思います。

皆様のご協力と若干の外的状況の変化により、JVCの運営資金の減少に若干の歯止めがかかりました。ありがとうございました。今後もより多くの方々の理解を得られるよう努力していきます。

## ▶自己資金の重要性

JVCは、戦争・災害などの際、緊急救援活動を行なえる機能をも兼ね備えた団体を目指しています。しかし、プロジェクトに指定された募金はそのような場合に使うことができません。状況に応じて自由に使える資金がどうしても必要になります。

また、新たなプロジェクトを開始する際には、現地でどのようなニーズがあるのか、どのようなプロジェクトが可能か、あるいはどのぐらい予算が必要かなどの調査が必要です。これに充てる費用も自己資金の場合がほとんどです。さらに、これまでも何度も訴えかけてきたことですが、各地域におけるプロジェクトを支える東京事務所などの経費も自己資金からです。資金を募って現場に送る、現場で求められる人材を探して派遣する、あるいはJVCのことを知ってもらうための広報、各支援団体や国際機関との連絡・報告など、東京本部やバンコク事務所は各プロジェクトを支えるための重要な機能を果たす部分です。

ところが、以上述べたような部分には資金が集まりにくいのが実情です。

## ▶「JVC全体」を支援して下さい。

以上のようなことから、JVCの活動の目的やその方針を充分理解された上で、JVCの特定のプロジェクトの支援だけではなく、「JVC全体」を支援して下さい。もちろん、「常に活動について評価・反省し、本当に有効な援助の実施」が全体支援の前提となることは言うまでもありません。具体的に次のようなお願いをしたいと思います。

### ①プロジェクトを指定しない募金をお願いします。

プロジェクトを指定しない募金はこれまで「インドシナ難民救援募金」に含めていました。インドシナに限らず、必要な救援を行なうための募金として、7月分から新たに「無指定募金」の項目を設け、報告することになりました。

### ②JVCの会員になって活動を支援して下さい。

継続的な支援と同時に会員総会に出席し、プロジェクトの内容・運営などについて意見を述べて下さい。また、会員の増加にご協力下さい。

### ③地域ごとのバザーの開催、フィルムの上映を通じ、その収益金の一部をお寄せ下さい。

機関誌で取り上げて、一時的に募金が増えても、私たちが訴えている自己資金の不足は解決されません。皆様の継続的なご理解とご協力が得られるよう、40号の「財政緊急アピール」に引き続き、重ねてお願いする次第です。



先日、ある方が東京事務所に来られ、寄付をお願いされました。その方の奥様が先頃お亡くなりになられたのですが、入院されているとき、アフリカのモザンビーク視察から戻ったばかりのK医師から、アフリカの子どもの話を聞き、JVCを通じてアフリカのために使ってほしいと遺言されたそうです。「JVCに寄せられる浄財に託された個々の方々の“おもい”を忘れてはならない」と改めて痛感いたしました。心よりご冥福をお祈りいたします。

# こうしてJVCの運動に参加しよう

## JVC東京事務所

最近、「地方で、あるいは自分の身近なところからでもJVCの活動に参加できないでしょうか？」というお便りが寄せられるようになりました。以下に列記したものは、活動を始めるためのほんの一例にしかすぎませんが、参考になれば幸いです。自主的な個人の意志の上に成り立っているのがJVCです。あなたも始めてみませんか？事務局も協力いたします。

### ◆地域で学習会を

関心のある人を集めて、定期的に学習会を持ちましょう。難民とは？貧困とは？飢えとは？南北問題とは？こうした疑問に対して自分なりの解答を導き出し、何ができるか？お互いの意見を出し合い、認識を深めましょう。自分の身近な問題でありながら、世界的規模の問題と密接につながるテーマを選ぶのはいかがでしょうか。JVCは、難民問題を中心に、以下の広報用資料を用意しています。

16mmフィルム、ビデオ・テープ、スライド・セット、写真セット、機関誌「トライアル & エラー」、パネル、他機関・団体からの各種資料、一般図書、新聞の切抜き、その他

また、次の様な集いを企画・実施しませんか。

报告会、講演会、フィルム・ビデオ上映会、パネル展、スタディー・ツアー、その他

国連機関や他団体等の資料が必要な場合、紹介または協力いたします。

### ◆情報集めを

事務局から一方的に情報を流すのではなく、各地域の情報、特に地域性豊かな情報を事務局にも送って下さい。新聞記事、ミニコミ記事、地方自治体の刊行物、団体・個人の活躍や、不透明な活動を続け

る団体の悪影響など、JVCの運動・活動に関係する様な情報を待っています。情報をより広く、より多く共有しましょう。

### ◆活動資金集めを

●バザー — 駅前、公民館、学校などでバザーを催しましょう。売る物は、古着、日用雑貨、手工芸品、絵ハガキ、新鮮な野菜などなど。基本的に、住んでいる地域で集め、その地域に還元して下さい。ただ単に活動資金を集めるだけではなく、リサイクル運動の一環ともなり、また、理解と仲間を得る機会になります。



### ◆最後まで使いましょ！

海外の難民キャンプで衣類が必要な時があります。しかし、日本から送るのが必ずしも有効とは限りません。たとえば、日本の婦人物スカート1着分のお金で、カンボジアの婦人物サロン（スカートの類）が何着買えると思いますか？約10着です。諸経費（船代、倉庫代、陸送代、人件費、通信費など）を加えれば、10数着は新品が買えます。自分が不要になった物を難民に送るのではなく、身近な人々の間で再利用、再々利用し、その分の“浮くお金”を現場に送り、現場で一番必要とされている救援活動・物に使うのが、より有効で、より適切な援助であると言えます。

●募金活動 — 家庭で、友人・知人間で、地域で、学校で、あるいは職場で集められる募金はJVCの貴重な活動資金となります。機会あるごとに呼びかけて下さい。

ただし、使途のあいまいな募金活動が各地で問題になっていますので、誤解を招かない様、十分に配慮しましょう。JVCでは募金者への報告は責任をもって行なっています。

募金活動の際に必要な材料を用意しています。

#### JVCパンフレット、募金シール、振込用紙

#### ◆会員集めを

学習会、各種の集い、バザー、募金活動を行なう中で、会員を募って下さい。JVCの運動を推し進めるのは会員ですので、会員募集は重要な活動です。以下の各紙を使って下さい。

#### 会員募集のご案内、JVC入会申込書、郵便振込用紙

#### ◆日本語家庭教師活動を

既に、インドシナ難民3,000人ほどが、日本に定住しています。日本社会の一員です。しかし、日本語が不十分なために、職場で、学校で、地域社会の中で多くの問題を抱えています。そこで、彼らの家庭を週1～2回訪問し、主に日本語を修得するためのお手伝いをしています。現在、50名ほどのボランティアが40家族を対象に活動しています。



#### ◆本部事務局（東京）での活動を

海外と日本国内をつなぐ「パイプ役」として、事務局での活動も重要です。「海外へは行けないが、

日本での活動ならば……。」という方はもちろん、やる気のある方なら歓迎いたします。週1～2回、定期的に来て下さい。

#### ◆海外の現場へ

JVCは「現場第一主義」を通して来ました。今後もこの方針は変わりません。現場は海外に限りませんが、JVCの特長のひとつは、「海外の現場が活動の中心」ということです。

海外の現場では、随時、活動参加者を募集しています。求人状況は、機関誌「Trial & Error」をご覧になるか、事務局にお問い合わせ下さい。

#### ◆場所の提供を

バザーを開催する場合、あるいは集会を開く場合などでも、常に頭を悩ますのが場所の問題です。もちろん、それ相当の金額で借りられますが、出来る限り経費を軽減し、最終的にはその分を現地の受益者のために有効に使いたいと考えています。短期間でも結構です。貸して下さいの人を紹介して下さい。

#### ◆器材・備品の提供を

事務局や日本語教室（大和市）などで器材・備品が必要です。特に今必要なものは、ワード・プロセッサ、書類整理用のスチール・ボックスなどです。詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

#### ◆ご意見・ご指摘を

海外の現場及び事務局で活動する専従ボランティアは、時として活動をトータルに捉える感覚を失い、自分の視野をせばめてしまうことがあります。そのような場合は特に、より客観的な意見・指摘が必要となります。運動・活動全般にわたるご意見・ご指摘をして下さることも、貴重な参加であります。JVCの門戸はいつでも開かれています。あなたの自主的な参加を待っています。

# JVCプロジェクト

1984年9月30日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
<b>タイ</b> カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●西崎憲司記念技術学校                              自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。9月現在、難民数は33,755人、JVC生徒数648名。カンボジア人教師によるサケオ職業訓練センター見学を計画中。</li> <li>●防犯灯                              夜間キャンプに侵入する強盗の被害を防ぐため、キャンプの外周に設置した161個のナトリウムランプの維持管理、およびカンボジア人作業員のための電気の基礎の指導。</li> </ul>	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル	ソムウェック・ルチャイシット トンディー・ソムカネ 稲垣三千穂、永井聖子 パニット・ポティビ 松坂 優、大村 卓
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民村)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●レントゲン移動診療                              移動レントゲン車による、難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。国境の軍事的状況は不安定で、危険のため限られた医療スタッフしか難民村へ入れなかった。国連による難民村の人口調査の結果によると、国境全域で推定25万人。</li> <li>●補助給食                              ノンチャン難民村の栄養失調児、病人、妊産婦、乳幼児とその母親を対象とした補助食供給と栄養教育。難民村人口20,357人中4,493人が対象者であり、内半数程が幼児・子供である。7月14日から、2期目の母親向けの栄養指導教室が始まった。</li> </ul>	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療部会、城西病院 西本願寺 結城青年会議所	林 達雄、金子一弘 サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ・プティ ヤビピン、大澤洋子 スラ・プロムチャン
パナニコム (第三国定住待ちの難民一時収容施設)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本語学校                              日本定住希望者のための日本語教育及びオリエンテーション。9月末現在生徒数7名。カオイダンから移動して来た日本定住希望者54名を対象に、授業開始の予定。</li> </ul>	天理教千葉	佐藤和美、鈴木絵理子 ティアン・パントゥー 浜崎妙子
タイ農村	<ul style="list-style-type: none"> <li>●給水                              スリン県12ヶ村での共同井戸掘りと基礎的健康教育。カオイダン技術学校との共同で製作したハンド・ポンプが、スリン県の農村にすえつけられる。</li> </ul>	モラロジーMIRC NTV* 一般寄付	佐藤正喜、井戸智樹 ブンナム・チャルンブリトゥム カモン・ミンムアン
バンコク市内のスラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>●スラム改善                              奨学金援助：スラム児童のための学費援助。                              図書館：児童、成人のための図書館。                              建材提供：スラム立退き者への物資援助。予定されていたスラム立退きが来年2月まで延期された関係で、現在は小規模に継続中。</li> </ul>	モラロジーMIRC NTV* 庭野平和財団 今井記念海外協力基金 JOFIC、一般寄付	タウィチャイ・タームクナノン 伊藤真理子 ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也
<b>カンボジア</b> (農村部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●井戸掘り                              タケオ県で農場のための深井戸掘り。</li> </ul>	LWF/LWS	箕田健一
<b>レバノン</b> (中近東)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●医療ボランティア派遣及び緊急物資援助                              4月30日をもって、医療ボランティア派遣については無期延期。今後は現地のNGO(アームル、テル・デ・ゾム)と連絡をとりながら緊急事態における物資・資金援助に備えていく。</li> </ul>		

\* NTV24時間チャリティー委員会

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア (マガネイ・キャンプ)	●農業による自立促進 エチオピアからソマリアへ逃れて来た難民を対象にした、農業による自立促進プロジェクト。今年5月から6月にかけて作付けしたトウモロコシ、オクラ、トマト、ソーガムなどが実り始めた。今後は、本格的に農業を営みつつ、農業を中心としたコミュニティづくりへと広げて行く。具体的には、識字教育、衛生教育、料理教室（特に魚や野菜の調理法）など。これらのための人材・資金調達及び広報を行なう必要がある、11月初旬に、高橋一馬（農業技術者）が帰国の予定。一方、エチオピアから新たな難民約100,000人がソマリアに流入しており、緊急救援が必要となっている。この難民への援助及びソマリア以外の国での救援活動も現在検討している。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 一般寄付	税田芳三(ソマリア事務所長)、柴田久史、高橋一馬 掛村 均、モハメッド・アデン・モハメッド シャッド・モハメッド・ムザル、ラシッド・モハメッド・ランジャイル モハメッド・ハジ・ヌール その他12名のソマリア人スタッフ
日本国内	●日本語家庭教師 首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉、山梨）に定住している難民への日本語教授と生活指導など。これまで準備を進めていた神奈川県大和市での日本語教室が10月10日に開校した。	禅林寺 UNHCR 中部善意銀行 一般寄付	森山久寿子 他約50名
	・バザー、ハンディクラフト販売 ・カオイダン「国境を越えた人々」上映運動 ・スタディー・ツアー企画実施 第3回を8月1日から8日までの日程で実施した。 参加者6名。	浄土真宗本願寺 派高岡寺族青年会	関田鶴子 他約20名 鶴田三芳他 熊岡路矢他
東京事務所 (本部)	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC説明会～毎月第1・第3月曜日 午後6時から9時まで。 ・TELEX発信・受信便宜供与	全国社会福祉協議会 一般寄付  博報堂	岩崎駿介（代表） 星野昌子（事務局長） 熊岡路矢、鶴田三芳 佐々木志保、下園宏司 他20名
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報、バザー等。 季刊「ニュース・レター」（英語・タイ語）発行 各プロジェクトで作成されていた評価プログラムの総括会議が、来月中旬行なわれる。これをもとに来年度の活動方針を討議するため東京から2名派遣する。		高塚政生（バンコク事務所長）、本橋 栄 嶋 紀晶、石橋節子 ポンピモン・チャイブーン 勝俣江美、他約10名
人材派遣・養成プロジェクト			
シンガポール (ホーキンスロード ・キャンプ)	・UNHCR一ベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト 教会議	ニール・リー
フィリピン (パターン・プロセッ シングセンター)	・ICM一第3国固定住手続きにともなう医療業務 外来記録によれば、風邪、皮膚病、結膜炎、寄生虫、マラリア、結核などが特に多い。	ICM 結城青年会議所	竹内敦子
タイ	・マヒドン大学で熱帯医学研修中。	結城青年会議所	林 達雄

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所  
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救援募金(9月小計 5,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
  - クロントイ・スラム募金(9月小計 3,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
  - デッグ・スラム奨学金(9月小計 8,000円) バンコク市内のスラムの子ども達が学校へ通う費用を援助します。
  - アフリカ難民救援募金(9月小計 65,500円) ソマリアでの難民自立促進農業プロジェクト費として使われます。
  - レバノン被災民救援募金(9月小計 0円) レバノン被災民に対する医療活動及び物資援助に使われます。
  - 日本語家庭教師募金(9月小計 10,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
  - 医療募金(9月小計 35,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
  - ボランティア募金(9月小計 10,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
  - JVC運営経費募金(9月小計 59,094円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
  - 無指定募金(9月小計 498,500円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

## 編集後記

▶先日、タイから帰国した我々の同志が、またもや入院した。ちょうど、ソマリアから送られてきたテープで柴田が「日本へ帰国したら、すぐ病院送りだし……」と言っていたの聞いていた矢先のことだった。「またもや」というのは、ソマリアの税田が、帰国早々、入院したからである。▶とにかく、タイやアフリカの現場から帰国すると、程度の差はあるものの、体の不調を訴える者がほとんどである。精神的な事はもちろん、厳しい自然条件、充分とはお世辞にも言えない食糧や生活必需品など、悪条件ばかりである。逆に、そうした状況の地域に我々を待っている人々がいるからこそ、活動の意義があるのだと言えるのかもしれないが、しょせん、生身の人間である。▶現場から帰国したメンバーを見るたびに、ある種の精製され凝固した「結晶」のようなものを感じるがある。「ボランティア」という言葉に対して、よく「奉仕者」という訳語が使われる。いかにも「献身的な」というイメージがあり、好きになれないのだが、「現在の地球が抱える諸問題を現実的に促え、より良い社会を構築するため、また次世代により良い環境を残すために、自主的に自分の身近な所で、あるいは海外の現場で行動をする人」ではどうだろうか。

昭和59年10月20日発行(毎月20日発行)

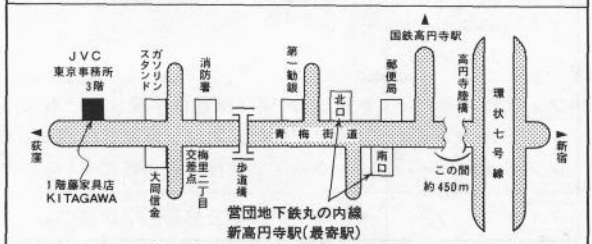
編集人 下園 宏司  
 発行人 星野 昌子  
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所  
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F  
 ☎ 03(316)3253

バンコク事務所 JVC THAILAND  
 67 South Sathorn Road  
 Bangkok, THAILAND ☎(286) 4857

ソマリア事務所 JVC SOMALIA  
 c/o UNHCR P.O.Box 2925  
 Mogadish, SOMALIA  
 Telex: 794 HICOMREF SM

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共300円